

# 古河文化見聞録

## 枚田水石 ～知られざる古河の画家～

穏やかな流れの川のもと、雨模様の湿気を感じさせる空間のなかに、すっきりと立つ竹の姿がみえます。張りのあるみずみずしい葉をつけた竹が、墨の濃淡を使い分けて描かれ、画面の奥行きが表現されています。

清麗な趣のあるこの墨竹図の作者は枚田水石。あまり名は知られていませんが、幕末・明治時代に活躍した古河出身の南画家奥原晴湖(1837～1913年)の絵の師匠であったことから、晴湖の画歴においては必ずといっていいほど登場する人物でもあります。

▶枚田水石筆「滑川雨意図」



水石の画業についての詳細はよく分かりませんが、今日、目にするのできる水石作品からも、墨竹画を得意としたこと、また、晩年、晴湖に絵画の手解きをした画家として、古河の絵画史上にその名を残しています。

### 古河藩士・枚田源之丞

枚田水石は通称を枚田源之丞、諱は之盛、字を保之といました。後に勘解由と通称しています。「水石」は号で、このほかに竹所、文石とも号しました。

寛政8(1796)年2月18日、土井家の世臣枚田盛庸の嫡男として古河に生まれました。水石は文化4(1807)年に藩主土井利厚に御目見をし、文化8(1811)年家督を相続しています。

文政5(1822)年に利厚が亡くなり、利位が藩主となると、水石は文政7(1824)年に作事

奉行になったのち、文政9(1826)年江戸詰となって出府、普請奉行と目付役兼帯の役職につき、江戸の地で利位に仕えています。利位が寺社奉行のときは寺社役を務めるなど、利位が信頼を寄せた家来のひとりであり、昨年発表された鷹井伶氏の小説『雪の殿様』にも、その親密さが描かれています。

### 大塩平八郎の乱と水石

古河藩主土井利位は、天保5(1834)年大坂城代となります。これにともない、水石も大坂に引越し公用人を務め、翌年には公用人兼帯で御先手物役の職にありました。そうしたとき、大塩平八郎の乱(1837年)がおこります。

この時、水石は「擇ばれて急を江戸に告ぐ。其の発するや敵營の前を過ぐ。乃ち馬腹に身を横へて以て銃火を避け事なきを得たり。」(藤懸静也著「古河の画家」『古河郷友会雑誌』第20号)と、事件を幕府に報告する役目を果たし、乱の鎮圧にあたって功労があったことが伝えられています。

大塩平八郎の乱の平定という功績で、利位はこの年、京都所司代に栄転となり、水石もともに京都に移りました。翌年、利位が江戸西の丸老中に昇進、水石は用人に就任しています。

### 水石の絵画

古河・大聖院にある水石の墓碑には「好文雅善絵事」と、水石は文雅を愛し、絵を好んでいたことが刻まれています。南画家谷文晁(1763～1840年)の門人となり、公務の余暇を使って絵画を習いました。最初、師の一字を授かり「文石」と称しましたが、ある画会の席で、その号を譲って欲しいと望まれた